

オーストラリア発 移民向け母語教育 移民コミュニティとの協働

シドニー事務所

移民国家オーストラリアでは、英語を母語としない生徒への英語教育を実施する一方で、移民と協働し、母語教育も推進しています。

州政府と協働し、保護者が運営する母語学校

オーストラリアの公用語は英語ですが、移民によって使用されている言語数は 400 にも上ります。その多様性を国の強みとして活かそうと、連邦政府レベルでは現在「アジア言語教育」を推進しています。また教育を所管する州政府は、母語を学ばせるために、保護者が放課後や土曜日に運営している学校を支援しています。

シドニーを州都とするニューサウスウェールズ州では、エスニック言語を「コミュニティ言語」と呼び、保護者らが運営する学校を「コミュニティ・ランゲージ・スクール(以下、CLS)」としてサポートしています。CLS は州内 400 カ所以上で、主に公立学校施設を利用して実施されており、51 言語に対応しています(2010 年)。CLS として認可を受けるためには、州政府が定めた指導要領に沿うこと、資格を持つ教師を雇用すること、学期は公立学校と同様とすること、といった要件に沿う必要がありますが、生徒一人あたり年間 60 ドルの助成のほか、教師の研修をはじめとしたサポートを受けることができます。

日本語土曜学校

では、CLS では実際にどのような運営が行われているのでしょうか。

シドニー日本クラブ(日本人定住者を中心とした非営利組織)では、シドニー近郊において 3 カ所で日本語学校を運営しています。運営にあたる保護者の多くはオーストラリア人を夫とする日本人女性です。学校に携わるようになったきっかけは、子どもが学校でも家庭でも英語を使用しているため、自分一人で日本語を教えるには限界があると感じたから、と話されていました。



シドニー日本クラブ日本語学校ダングス校

授業の様子

その一つ、ダングス校(シドニー北西部)は、地元の公立小学校の教室を無償で借りて、毎週土曜日午前9時半から午後12時15分まで、3時限の授業を行っています。テキストは日本で市販されている自宅学習用の練習帳のほか、運営委員による手作り教材を利用しています。クラスは現在8クラスでレベル別に構成しています。最年少は4歳、最年長は中学1年生。手遊び歌などを交えた授業が行われるクラス、ひらがなやカタカナを学ぶクラス、1つのテーマに沿って自らの意見を表明できるレベルのクラスなどがあります。また、休み時間にはラジオ体操を取り入れ、おにぎりや団子、お好み焼きの調理実習なども実施するなど、日本文化に触れる機会も設けています。

運営にあたっては様々な苦労もあるそうですが、3校の運営委員が密に情報交換しながら互いに協力しておられます。彼女たちの、我が子に母語を学ばせたいという強い思いは、これからもよりよい学校づくりを推進する原動力となっていくだろうと感じました。

日本における移民生徒への母語教育

日本においては、外国人生徒が日本語の授業についていけずに不就学となるケースが取りざたされています。また、自身の母語や文化について劣等感を抱く生徒がいたり、さらに、日本語を話すことができない親と意思疎通ができないということも起きています。外国人の子どもたちが日本で生活する場合には、日本語はもちろんですが、彼らの母語の能力を伸ばしていくことが、学力的発達と心理的発達の双方の側面から重要であることも指摘されています¹。オーストラリアで実践されている母語教育は、保護者と州政府が協働し、子どものバックグラウンドを肯定的に捉え、さらに子どもの発達につなげていこうとするものであり、日本における外国人生徒への教育にとって示唆に富んでいるといえるのではないのでしょうか。

(金所長補佐 池田市派遣)

¹ 藤田保『日系人労働者子女と継承語教育』上智短期大学紀要第24号、2004年